

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

法政大学日本文学科卒業論文題目

雑誌名	日本文学誌要
巻	3
ページ	60-63
発行年	1959-08-16
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018979

法政大学日本文学科卒業論文題目

一九五八年度

△古・代△

蜻蛉日記の世界

若菜上下巻の世界

宇治十帖における薫の人間像

紫式部日記における形容動詞の

考察

今昔物語の宗教性とその文学的

イズムとの連関について

△中・世△

新古今集小論

方丈記研究——意味構造の分析

と主題考察——

鴨長明と方丈記の成立について

金槐集の無常観

宇治拾遺物語に於ける民話性

宇治拾遺物語鑑賞

平家物語——叙事的面よりの

考察

平家物語の研究——抒情性につ

いて——

平家物語——思想について——

平家物語論——思想を中心とし

て——

鈴木 美実

平家物語における人間像

谷口 潮

平家物語を通して見た中世武士

の生き方

真庭 勇

徒然草と方丈記

つれづれ草の分類

太平記私論

御伽草子の方法

御伽草子の類型性に就いて

室町小歌の概観——閑吟集を中

心に

狂言の世界

川端 文雄

永井 信雄

松本保斐古

松沢 嶸

松井 透

古矢 恭子

宮崎美知子

小川 隆子

井科 郁哉

田中 和雄

小野 格士

遠藤 進

須貝 俊夫

斎藤 博章

森田 信三

狂言の一側面——宗教思想的観

点より

狂言のうちに、ひろく一般にい

われている諷刺ははたしてあ

るであろうか

近古小説考

説経節の宗教性と演劇化

説経浄瑠璃の世界

岡基 秀信

前沢 勝洋

井川 小浪

伊藤 慶子

熊野 健一

△近・世△

好色一代男——価値論の問題

西鶴好色一代女について——好色五人女を

中心に

西鶴好色五人女について

西鶴好色一代女作品論

西鶴世間胸算用作品論

宿業の文学——万の文反古私論

西鶴に於ける作家意識の変遷

西鶴における談笑性と隠者性に

ついて

芭蕉——蕉風俳諧の確立まで

蕉風歌仙について

蕉風の連句について

奥の細道研究

奥の細道を中心としてみた芭蕉

佐藤 暹

宮地 勝也

橘川 郁夫

安達 保子

村田 文子

森 健

岩崎 武夫

庭野伸一郎

香月 緩子

荒木田三郎

白水 敏

森元 金竜

の生き方とその文学のあり方

について——芭蕉の表現上

における創造性を中心として

芭蕉の旅の先蹤としての西行

芭蕉小考——日本人の美意識に

ついての問題提起として

近松世話浄瑠璃の本質

近松の心中浄瑠璃——その時代

背景と心中悲劇の方法・展開

について——

近松世話悲劇に描かれる女性達

近松の世話浄瑠璃

近松の浄瑠璃における義理

夜半亭蕪村

一茶論

東海道四谷怪談に於ける南北の

戯曲方法

鶴屋南北について

野村望東尼論

初期歌舞伎の世界

川柳の本質的特性と前句附の変

遷

落語史要

田沢稲舟論

〈近代・現代〉

中江兆民の思想と文芸について

の一考察

斎藤 光恵

二葉亭に於ける近代リアリズム

東野 三樹

の道

菅野啓之介

蓬萊曲小論

糸川 和子

一葉小説の思想性とその構造に

ついて

樋口一葉の文学における女性像

松浦宗三郎

樋口一葉の研究——生活と直結

竹中 功

した諸作品

長橋 透

樋口一葉の総合的分析

森 京子

広津柳浪の深刻小説

正田亮一郎

国木田独歩の運命論者について

東甫 宏昭

独歩覚え書

破戒論

「家」について

島崎藤村論

石川啄木論

漱石の初期の作品について

漱石の作品に現われた女性——

それからの三千代について

夏目漱石の道草における夫婦関

係

明暗論

漱石作品のユーモアについて

徳田秋声「新世帯」の一考察

あらくれについて

徳田秋声論

長塚節「土」の文学史上におけ

る成果

長塚節歌集「鍼の如く」について

小説家としての長塚節

永井荷風文学の形成

小川未明論——その童話作家に

いたらせたもの——

芥川竜之介における自我につい

ての考察

芥川の文学

芥川竜之介論——文学の方法に

ついて——

芥川竜之介論——その創作方法

について——

屋富祖仲啓

石蔵 正二

小泉 隆

本間 洋子

小原 弘子

三浦 忠

今永 親

岡本 正

太田 宗達

宮川 博

山本 恵子

諸口 敏和

宮武 妙子

草森 則之

小堀 誠

佐々木祐三

中村 実

松波 巖

前期芥川文学を辿る	長岡 弘	葉山嘉樹の小説	中村 馨
芥川文学に関する一考察	内田 保男	「伸子」論	根本 絹子
芥川作品と生活	武者さき子	宮本百合子論——初期の作品を	
芥川竜之介論	大坪 正稔	中心に——	諸星 博一
芥川竜之介——人と作品——	今橋 賢	宮本百合子の戦時中の作品につ	津金 幹彦
いて		いて	高橋 正毅
芥川竜之介の芸術至上主義につ	鳥居原明雄	徳永直の作家態度及びその作品	田中 良忠
いて		転向問題と島木健作	
菊地寛の精神鑑定——芥川の自	酒井 稔雄	堀辰雄とロマン誕生——昭和初	野村 昌雄
殺と菊地の通俗化——	藤本 孝広	年代における堀辰雄の位置	吉田 通
有島武郎と「或る女」		堀辰雄研究	
有島武郎小論——「或る女」を	俵山 憲一	太宰治の一考察——初期の作品	大村 吉雄
中心に——		をめぐって——	
有島武郎の個人主義——「惜み	出村 昌慶	太宰治に於ける自虐の背景と作	
なく愛は奪ふ」を中心に——	高岡 勉	家的純粋性	長谷川孝典
山本有三論	片山喜世子	太宰治における自虐形成および	
「真知子」と野上弥生子	佐々木静雄	その背景	板本 敏美
水上瀧太郎の輪郭		太宰治論	猪子 猛
宮沢賢治——人間形成の挫折を	近藤 喜一	伊藤整の客観小説における私小	羽山 元紹
めぐって——	浅井 治	説的方法	
宮沢賢治——童話研究	檜森 和子	伊藤整論ノート——詩業を中心	中原 亨
横光利一の初期の作品について	小田井良夫	として——	里原 昭
横光利一論	倉持 建雄	伊藤整小論	
「雪国」論——その成立——	黒沢 正勝	金子光晴小論——リアリズム詩	江沢 滋生
川端康成論——人と作品——	内山 善一	の展開における——	
中原中也の詩の背後にあるもの			

法政大学国文学会会員名簿

第1回から1958年卒業生まで、および
現在の日文科教授の名簿で、多少残部
があります。

頒価50円（送料共）申込は国文学会へ

日本の近代に於ける新演劇の成	丸島 照雄
立は伝統演劇とどの様な関係	
にあるか	
プロレタリア戯曲のリアリズム	
への過程	細谷 文子
児童文学論	岡村 静代
芥川賞作品の昭和文学に与えた	
影響	筑摩鋭太郎
民衆詩派の歴史的な意義	大江 卓二
現代文学の出発	渋谷 司郎
近代小説文休への始動	松沢 秀幸
現代におけるドラマとオペラ	岡本 一彦

法政大学国文学会会則

一九五七年八月一日
総 会 決 定

法政大学国文学会会則

第一章 名 称

第一条 本会は法政大学国文学会と称する。

第二章 目的および事業

第二条 本会は法政大学における日本文学研究の伝統を継承し、科学的創造的日本文学研究の推進を目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため左の事業を行う。

- (一) 研究会、講演会、親睦会等の開催。
- (二) 機関誌その他の発行。
- (三) 他の学会・研究団体との成果の交換。
- (四) その他右の目的に添う事業。

第三章 会 員

第四条 本会は左の会員によって構成され

る。

(一) 法政大学文学部一部日本文学科在学
生。

(二) 法政大学文学部および一部日本文学科
卒業生。

(三) 法政大学文学部一部日本文学科におけ
る日本文学担当の現教員。

(四) 法政大学大学院人文科学研究科日本文
学専攻在学生及卒業生。法政大学二部日
本文学科在学生及卒業生、法政大学通信
教育部日本文学科在学生及卒業生、法政
大学大学院一部二部日本文学科に在籍し
たもので入会を希望し、幹事会の承認を
得たもの。

(五) その他本会に寄与したもので幹事会に
おいて推せんされたもの。

第四章 役員及機関ならびに会議

第五条 本会に左の役員をおく。

(一) 会長一名、日本文学科主任教授。会長
は会を代表し、総会・幹事会を主宰する。

(二) 幹事若干名、会員の互選により、任期
一年、再選を妨げない。

第六条 総会は重要な事項について審議決定
するもので、毎年一回開くものとする。本

会の目的推行のため必要と認められ、幹事
会の要請がある時、会長は臨時総会を開か
なければならない。幹事会は月一回以上開
催し、会務を審議決定し、これを実施す
る。

第五章 会 計

第七条 本会の資産は次の各項より成る。

- (一) 会費。
- (二) 寄附金。
- (三) その他。

第八条 本会の経費は前条にあげたものをこ
れにあてて。

第九条 本会の会計年度は毎年四月一日より
翌年三月三十一日に至る。

第十条 本会の予算は年度開始前幹事会の決
議を経て定め、決算は幹事会に提出してそ
の承認を受けるものとする。

第六章 事務所

第十一条 本会の事務所は法政大学内にお
く。

附 則

本会則は総会の承認がなければこれを変更
することができない。